

【実践報告】

教職実践演習授業報告（中・高，栄養）

広島文教女子大学人間科学部

グローバルコミュニケーション学科	教授	笹原豊造
人間福祉学科	教授	菅井直也
初等教育学科	准教授	白石崇人
人間栄養学科	講師	塩田良子

0 本演習の方針

本演習が、未来の教員に期待する能力は多岐にわたっている。例えば、平成24年に中央教育審議会が本演習に関連して出した答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」内で、教員に対して期待されている能力・知識に関するキーワードは以下の通りである。グローバル化や情報化への対応，少子高齢化社会への対応，思考力・判断力・表現力等の育成，いじめ・暴力行為・不登校等への対応，特別支援教育の充実，ICTの活用，イノベーションや新たな社会を創造などである。

限られた時間でこれらの期待に応えるのは困難なことであるが、教員として最小限必要な資質能力の全体を明示的に確認し、今後の課題を個々が認識することを目指していきたい。

1 活動スケジュールおよび活動場所（231教室）

日程	テーマ	担当教員
9月26日	ガイダンス 授業のねらい・計画・評価など	全教員
10月3日	特別支援教育の今日的課題Ⅰ～幼児と低学年児童の場合～	古田（講師）
10月17日	特別支援教育の今日的課題Ⅱ～高学年と中学生の場合～	古田（講師）
10月24日	教育時事問題（1）	笹原
10月31日	教育時事問題（2）	笹原
11月7日	教育時事問題（3）	笹原
11月14日	教育時事問題（4）	笹原
11月21日	食育に関する実践	塩田
11月28日	道徳ワークショップ	白石
12月5日	学級づくり模擬授業の実践（1）	菅井
12月12日	学級づくり模擬授業の実践（2）	菅井
12月19日	保護者・地域対応ワークショップ	白石
1月9日	英語に関する実践	笹原
1月16日	まとめ「私の目指す教師像」（1）	菅井
1月23日	まとめ「私の目指す教師像」（2）	菅井

2 活動の概要

(1) ガイダンス

①活動のねらいおよび実際

本演習が設置された目的について確認した。本演習は、教員として求められる4つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解に関する事項④教科等の指導力に関する事項）に関して、4年間の総まとめとして位置付けられていることを確認した。授業の進め方として、指導案の作成や模擬授業・場面指導の実施などの演習、事例研究、グループ討議等を行うことも合わせて確認した。

本学で本演習が実施されて5年目を迎える。これまでの学生の発表及び議論を通して、教育に関する歴史認識が欠如、教育に関する時事問題に関心が薄いことなどが指摘されてきた。今日的課題であるいじめや体罰などを議論する際に、教育に関する諸課題に関する基礎知識の共有はどうしても避けて通れない作業である。このことを踏まえ、以下の課題を個々に課し、「教育時事問題」として発表・討議することとした。

- | | | | |
|----------|--------|---------|--------|
| ・君が代と日の丸 | ・教育基本法 | ・学習指導要領 | ・就学支援 |
| ・教科書無償制度 | ・学力テスト | ・教育委員会 | ・教育公務員 |
| ・学校という組織 | ・教師の仕事 | ・いじめ | ・体罰 |
| ・教科書検定 | ・多忙な教員 | ・大学入試改革 | ・道德教育 |
| ・中央教育審議会 | ・ゆとり教育 | ・子どもの貧困 | ・不登校 |

(2) 特別支援教育の今日的課題

①活動のねらいおよび実際

「特別支援教育の今日的課題Ⅰ～幼児と低学年児童の場合」と「特別支援教育の今日的課題Ⅱ～高学年と中学生の場合」の演題で、古田寿子氏2回の講義であった。本講義は現場で日々実践を行っている教師の生の声を聴く貴重な機会である。特別支援教育関連の用語には、耳にしたことはあるが、実はその意味をよく知らない語句が多々ある。事例を交えながら、それらを分かり易く解説がなされていた。例えば、ADHDの3つのタイプ（・不注意優位型・多動性・衝動性優位型・混合型）、主な発達障害（・知的障害・自閉症スペクトラムASD・注意欠如/多動性障害AD/HD・学習障害LD）などである。

現場の実践者の声は、どんなに優れたテキストよりも学生たちの心に届いたようである。

②学生のレポートより

○障害には様々なものがある。今回聞いたのは主に自閉症スペクトラムの特性とその対応についてである。自閉症の人は一般の人と脳内の情報処理の仕組みが異なっており、各々が持つ特性を考慮し生かした対応が必要だとわかった。例えば、目で見えて理解することは得意だが、耳で言葉を聞いて理解することが苦手な子には、名前の書いてあるイラストをカードの活用が効果的という。また、柔軟に考え、物事を察することが苦手なので、抽象的であいまいな伝え方をすると混乱させてしまうようだ。（中略）今回聞かせていただいたご講演を参考にして、今のうちに発達障害についてさらに理解を深めていきたいと思った。

○発達障害を持つ児童や、生徒に対する今日の教育とその課題についてのご講演を聞いた。障害者の権利に関する条約が、2006年に採択されたものであり、比較的新しい条約だということがまず印象的であった。さらに、日本がその条約を批准したのが2014年のことで、採択されてから8年しか経っていない。障害者に対する法整備や教育がなかなか進まない事実がよく理解できた。障害者に対して酷い言葉を投げかけ、暴力をふるうだけが差別ではなく、支援が必要な障害者を無

視することも明らかに差別であることを認識した。自分の小学校時代、中学校時代、クラスにいた障害を持つ子をかからかう生徒たちを見て、あまり気分が良くなかったことを覚えている。しかし、自分がからかわれるのを気にして、あまり積極的にその子を助けようとはしなかった。今思えば、自分が取っていた行動も充分差別と呼べるもので、いじめと言っても変わりはない。

(3) 教育時事問題

①活動のねらいおよび実際

ガイダンスで学生に割り当てられたテーマに関して、学生が個々に調査してきた内容を発表し、その後、そのテーマについてさらに討議を深めた。20のテーマを10人の学生で割り当て、1コマに5名の発表の予定であったが、往々にして時間が不足して全員が発表できないことがあった。あまり、欲張らずにテーマを絞り込む必要があった。

教育課題に関して、基本的な知識を共有するというこの作業は学生にとっても新鮮かつ有用であると評価できる。

②学生のレポートより

○「学習指導要領」－学習指導要領と聞くと、各学校がカリキュラムを作る際に基となるものとらえていた。しかし、改正の歴史を振り返り、その当時の様子を調べることにより見方にも変化が生じてきたと感じる。それは、教育は時代や社会によって異なり、学習指導要領の歴史の変遷はその時代や社会を教えてくれる判断材料であることである。

○「多忙な教員」－中学校の先生は各専門教科の授業を行うほか、生徒指導やクラブ活動の指導、学校行事の運営などを行う。中学校は多感な時期であるため、生徒一人ひとりの個性を尊重しつつ、進路や人間関係などに不安を抱える生徒たちの心のケアを行うことも大事な仕事である。教材の準備やテスト作成、保護者との面談などは、生徒が登下校する前後の時間に行うことが多いため、勤務時間が長くなりがちである。(中略)日本の中学校教員の一週間当たりの労働時間は59.3時間であり、はOECD(経済協力開発機構)加盟国(平均38.3時間)の中でワースト1位である。

(4) 食育に関する実践

①活動のねらいおよび実際

学校における食育を進めるためには、食に関する指導の基本的な考え方、指導方針等を明確にし、教職員の共通理解を図り、学校の教育活動全体を通して行われることが必要とされている。

栄養教諭としてどのようなかわり方が可能なのか、「食育を各教科(英語)と連携しながら進める」をテーマに、マイクロティーチングを実施した。2グループに分かれ、学年、授業形式(単独またはT-T)、教材等は自由に設定して計画し、展開部分を中心に20分間授業を実施し、その後討議(批評会)を行った。

受講学生が行った授業の主題は、「理想の朝食について考えよう」「調理で使う動詞を知ろう」で、いずれもT-T形式で行われた。教科(英語)の特質に応じ、創意工夫が見られたが、討議(批評会)では、多くの課題が挙がり、各教科における食に関する指導の展開の難しさを実感する機会になった。

②学生のレポートより

○理想の朝食を6つの食品群を用いて指導しましたが、英語の授業というよりは特別活動の時間における食育の授業のようになりました。英語の要素としては、簡単な英単語の復習のような感じになってしまったので、文法の振り返りなども含められたら良かったと思いました。

○教科書内容は終了して、日常生活で使う英語の学習を想定し、調理をする際に使う動詞を取りあげることで食に触れた授業内容となるように計画しました。クラスルームイングリッシュを使い、

ワークシートを活用した楽しめる指導の工夫をすることはできましたが、日本と外国の調理用語の違い、食に関する和製英語の確認など食文化を絡めることで、日本語と英語の“言葉の違い”を深めさせることもできたのかなと思うので、その点は次につなげたいです。

(5) 道徳ワークショップ

①活動のねらいおよび実際

本時のねらいは、道徳教育の現代的課題（情報モラル・いじめ問題）に関わる事例について、グループで考えることであった。

学校の道徳教育は、来年度から激動の時代を迎える。平成27年3月、中学校学習指導要領一部改訂によって「特別の教科道徳」（以下「道徳科」）が設置された。この一部改訂版の指導要領は、平成29年3月の新指導要領の第3章にそのまま引き継がれ、中学校では平成31年4月から完全施行されることになっている。これからの学校教員は、道徳科を要とした新しい道徳教育を実践していかなければならない。新しい道徳教育の課題は様々であるが、その一つに情報モラル教育がある。現4年生は、生まれた時からインターネットの利用が普及した社会で生きてきたデジタルネイティブ世代である。だからこそ、同じくインターネットのある風景が当たり前のこととして育ってきた、今の子どもたちの感覚に寄り添えることが現場から期待されることだろう。彼女たちはベテラン教師に実践的指導力ではかなわないが、情報モラル教育においてはベテラン教師にはない生活経験を有しており、有利な立場にある。情報モラル教育に興味関心をもって取り組んでほしいと考えている。

当日は、以上のような内容を講義し、国立教育政策研究所の「情報モラル教育実践ガイダンス」を紹介した後、本時の活動の流れについて簡単に確認して、授業を進めた。まず、いじめ問題にかかわる情報モラル教育に関する事例を提示し、学生が自分の考えをまとめる時間をとってからグループ討議に入った。討議の結果は、グループごとに発表し、クラス内で共有した。考察・討議は、個別指導と全体指導や、保護者との連携、全体計画などの具体に関わる問題に沿って行った。

②グループから出た学生の意見概要

- ・個別指導に留まらずに全体での指導をする重要性
- ・学校に子どもの教育を任せつつもりになっている保護者から連携を引き出す難しさ
- ・地元の警察や企業から講師を呼ぶなどの指導上の工夫 など

(6) 学級づくり模擬授業の実践

①活動のねらいおよび実際

学生に課した課題は以下の通り。「教員の仕事のなかで、授業や校務分掌とならんで、学級担任の仕事が大きなウェイトを占めていることは、教育実習で再認識したことでしょう。そこで、学級担任のシュミレーションをしてみましよう。学級担任の仕事は、受け持ちの児童生徒との対面以前から始まっていますが、今回は、対面の日あるいはそれに続く日の「学級開き」の時間を想定します。この時間を構想し、そのうち約10分間のマイクロ・ティーチング（模擬授業）を実演して下さい。

校種・学年・クラスサイズ・所在地の実態などは、自由に想定して下さい。ただし、設定と構想の全体像が判るように、指導案（概案）を配布して下さい。

授業者以外は、構想されたクラスの児童生徒として行動してみましよう。

②学生のレポートより

- 児童や生徒が理解できるような言葉や言い方が、まだまだだなと思いました。
- いろいろな性格の生徒の反応があると思うので、その場で対応できるよう、準備が必要だと、改めて知ることができた。
- 1年間の学級運営につながる仕掛けをしなければならないことがわかった。

(7) 保護者・地域対応ワークショップ

①活動のねらいおよび実際

本時のねらいは、学校・教師に対するクレーム対応に関するロールプレイングを通して、保護者・地域対応の擬似的経験を行うことである。また、事前に、学校と保護者または地域との関係についてのニュースを履修生自身で選定し、どのような問題や可能性があるか考察する課題を課した。当日は、まず事前課題の確認・共有を行った。次に、教育現場におけるクレーム対応の特徴・背景について確認し、事例に沿ったロールプレイングを行った。ロールプレイングは、3名ずつのグループに分かれ、保護者からのクレームに関する2つの事例からグループが選択した事例に沿って行った。グループでは、それぞれ担任役・保護者役・観察者（記録係）に分かれてロールプレイングを行った。ロールプレイング終了後、どのような気持ちで応答したか、相手方にどのような気持ちや本音があると感じ取れたかなどについて話し合った。履修生は、高校までやアルバイトなどで実際に見聞きした経験などを生かしてロールプレイに取り組み、事後の話し合いで「あのときどうすればよかったか」など、具体的な対応方法を吟味していた。ロールプレイングは保護者・地域対応の大変さを実感する機会になったようである。また、事前課題は学校・家庭・地域連携の重要性なども考える機会になった。

②学生のレポートより

- 今回この記事[高校の部活の音がうるさいという地域住民からのクレームに生徒が対応した事例]を読んで、[略]積極的に地域の意見を聞きに行こうとする生徒の姿に感動した。また、この生徒の背中を押した林教諭は、記事の中で「地域と学校の希薄な関係について認識していた」とあったが、教師がこのように学内だけでなく学外のことに目を向けて考えていること、学校と地域の連携に必要なことであると考えた。
- [朝鮮学校で地域住民を招待して公開授業を行ったという記事を読んで]年々日本への移住者が増加傾向であることから、学校教育現場においても他国の子どもたちをどのように受け止めるのか、授業内容や生活状態、宗教などにおいても多くの理解や対応が必要とされ、教師に求められることはより複雑化することはもちろんのこと、保護者や地域への理解や協力を得ることが大切であると感じた。

(8) まとめ「私の目指す教師像」

①活動のねらいおよび実際

(学生に課した課題は、以下の通り。)

4年間の教職科目履修の最後でもあるこの時間は、「わたしの目指す教師像」を描き、発表することでまとめとします。

この4年間(それ以前があっても、もちろん構いません)に、学び考えたことのすべてを踏まえて、「わたしの目指す教師像」を描いて下さい。

A4版1枚に記述したものを配布し、それをもとに発表できるように準備します。

当日は、全員で共有し、今後の探求の出発点にします。

卒業研究とは別の(教職を選ばなかった人にはない)、4年間の集大成ですから、卒後の第一歩をキメるものを期待しています。

②学生のレポートより

- 生徒が安心して過ごすことのできる居場所づくりの出来る人間であり、また英語を様々な視点や方法で教えることのできる教師になりたい。
- 「ただ、生徒のために頑張る」だけではとても教師の仕事はできないのだと感じた。私は、「自分の身体を大切にできる教師」をめざしたい。
- 経験を踏まえて考えた私の理想の教師像は、「印象に残る教師」である。どの学年の担当になっ

たとしても、生徒の成長を近くで見守る役割を担う仕事に誇りをもって働きたい。

3 反省と課題

本年度より、事実上、時間数が半減し、週2コマ15回（2単位）が週1コマ15回（2単位）となった。今年度は昨年度の延長上にほぼ同内容で実施することができたが、受講者数が現況以上に増えた場合には、同様の内容・形態での実施は困難になるかもしれない。その場合は、やむなく一層の効率化や、別な形態を構想することになるだろう。

受講生に対し、限られた時間を有意義に活用するため、より充実した事前学修への取り組みが望まれる。発表、グループ討議を行う際に、活動テーマについて理解不足、準備不足を感じる場面が見受けられた。自身の考えを持ち、わかりやすく伝え、そのうえで他者の意見を聞き、多面的な意見交換をする場が本授業の意図であるため、単なる調べ学習にならないよう認識を強めることが必要である。